

老いの 入舞いりま

麴町常楽庵
月並の記

松井今朝子



文藝春秋



老いの入舞いりまい

松井今朝子

麴町常楽庵
月並の記

著者プロフィール

1953 年京都生まれ。早稲田大学大学院文学研究科演劇学修士課程修了。松竹株式会社に入社し、歌舞伎の企画・制作に携わる。退社後、武智鉄二氏に師事して歌舞伎の脚色・演出を手がけた後に作家に転身し、近世・近代の時代小説を相次いで発表。『仲蔵狂乱』(講談社)で第 8 回時代小説大賞受賞。2007 年『吉原手引草』(幻冬舎)で第 137 回直木賞受賞。主な作品に『東洲しゃらくさし』『幕末あどれさん』(共に PHP 研究所)、『道絶えずば、また』(集英社)、『円朝の女』(文藝春秋)、『吉原十二月』(幻冬舎)、恩師武智鉄二との交流を綴った『師父の遺言』(NHK 出版)など。

お　いり　ま　　こうじまちじょうらくあんつきなみ　き 老　い　の　入　舞　い　　麴　町　常　楽　庵　月　並　の　記

2014 年 6 月 15 日　第 1 刷発行

著　者　まつい　け　さ　こ
松井今朝子

発行者　吉安　章

発行所　株式会社 文藝春秋



〒 102-8008 東京都千代田区紀尾井町 3-23

電話　03-3265-1211 (代)

印刷所　凸版印刷

製本所　大口製本

万一、落丁・乱丁の場合は送料小社負担でお取替えいたします。
小社製作部宛、お送りください。定価はカバーに表示してあります。

老いの入舞い 麴町常楽庵月並の記

目次

巳^み待^まちの春 5

怪^{あやし}火^びの始^は末^{まつ} 65

母^{はは}親^{おや}氣^き質^{しつ} 119

老^{おい}いの入^{いり}舞^まい 171

老いの入舞い 魏町常楽庵月並の記

目次

巳^み待^まちの春 5

怪^{あやし}火^びの始^は末^ま 65

母^{はは}親^{おや}氣^き質^{しつ} 119

老^{おい}いの入^{いり}舞^まい 171

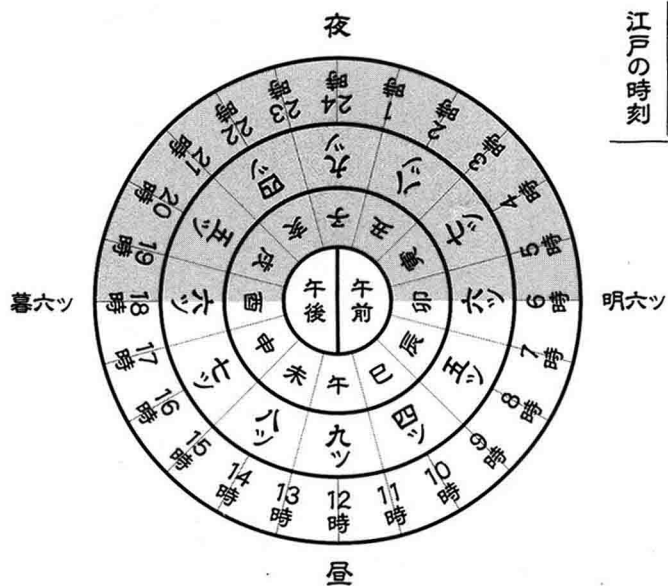
装画 北村さゆり

装丁 野中深雪

老いの入舞い

麴町常楽庵月並の記

江戸の時刻



巳^み待^まちの春

年が明けても凍てつくような寒さに変わりはない。ただ空は初春の長閑けさを^{のど}寿ぐように、淡い色をしている。

櫺子^{れんじ}から射し込む穏やかな朝陽を感じて、間宮仁八郎^{まみやにんぱちろう}はきりつと冷えた手水をざんぶと顔に浴びせた。水滴は引き締まった頬に弾かれ、濃い眉から深い眼のくぼみに伝わり、高い鼻筋の脇をなぞるようにしてしたたり落ちる。

やはり訪ねるなら今日のような日和がよからう。ぐずぐずと先延ばしをしても始まらない。常盤橋^{とぎわはし}の北町奉行所とはさほどの距離^{へだたり}もなく、見廻りを受け持つ界限なのだから。

とは思いつつ、まだどこかに億劫な気持ちが潜んでいた。

三日前、仁八郎は見習いからめでたく本勤並の定町廻り^{じようまちまわ}同心に昇格したところで、内与力^{うちよりき}の近藤に呼ばれた。

与力は直参が建前だが、内与力はもともと町奉行の家来で、主人が在任中は秘書官のような

役目を果たしており、

「御前じきじきの仰せである」

と、近藤は剥き卵のようになつりとした顔にはお似合いの、男にしてはやや甲高い声で用件を伝えた。

何も難しいことではない。町廻りのついでに月に一、二度、麴町こうじまちのさる庵に立ち寄ってくれというだけの話だった。

もつとも、それが奉行のお声掛かりとなれば、却って何やらいわくがありそうな氣もしてくる。

「お出入り先のご一家と思えばよろしい。必ずやそれなりの役得もあろう」

といわれたように、町奉行所の与力や同心は諸大名の屋敷に出入りをして、金品を受け取る者が多いのは事実だ。

見返りに何かと便宜を図つてやる。参勤交代で出府した国元の田舎侍や、中間ちゆうげん、小者らのうごむぞうが町で揉め事を起こしたら、なるべく主家の名に傷がつかないようにするのもそのせいだった。それは賄賂まいらいというより、大名家の家来になつて扶持ふちをもらうのも同然の行為だが、古株の与力や同心の中には数多あまたの大名家を得意先にして、余祿をむさぼっている者が少なくない。

弱冠の仁八郎は先輩に面と向かつて非難はできないものの、自身がそれをするにはまだ抵抗があつた。

しかしながら、これから訪ねる先は大名屋敷ではない。粗末な草庵であるらしいということが、話をいつそうわかりにくくさせている。

場所は平河天神社の近くとしか聞かされていなかったもので、仁八郎は界隈に足を踏み入れてまず麴町の文六を呼びだした。

文六は地元の御用聞きで、胡麻塩頭と渋紙のようになった肌の色が年季を物語っている。口もとに笑みを浮かべながら、鋭い目つきはいかにもそれらしい。

「へい旦那、常楽庵はたしかにこの近くでござんすが……」

といいさして、相手は一瞬なんとも困ったような表情を浮かべたものの、

「さればご案内を申しあげます」

尋常に頭を垂れて、前をすたすたと歩きだす。

仁八郎は大股でゆっくりと足を運びながら、周囲に目配りを欠かさない。あたりは緩やかな坂とやや急な坂が入り組んで交差しており、それぞれの坂道に沿って大小の町家が櫛比している。

天神社の周りは葦簀張りの茶店が建て込んで、いかにも門前町らしい賑わいを見せていた。

往来の者は通りすがりにそつと会釈をするのやら、足早に過ぎるのやらさまざまだが、茶店の男女はこちらを遠巻きに眺めるだけで声をかけようとさえしない。

思えば仁八郎はこの界隈の住人にまだ馴染みが薄いのだった。

南北の町奉行所を合わせても定町廻りの同心はわずかに十二人。それぞれが見廻る土地の範

囲はあまりにも広く、仁八郎の受け持ちではここよりも赤坂辺に広がる盛り場に何かと事が起きやすいので、見習いの時分からついそちらのほうへ足を向けてしまうのだった。

先を行く文六は西門前を過ぎると火除け地の方角へ足を向け、あたりはいつしか人家がまばらとなり、物寂しい冬木立ばかりが目についた。

もう少し先に行けば大きな屋敷の土塀に突き当たる手前で、左奥に柴垣が見え、どうやらお目当ての場所にたどり着いたらしい。

茅葺き屋根が付いた風雅な枝折門おりもんには、「常楽庵」と書かれた表札がはつきりと見える。

「へい、旦那。わっちゃ、ここでご勘弁を。中のお方とはまるで誼よしみがござんせんぞ」

文六は急にそわそわしだしてまるで逃げだすように離れて行つた。

仁八郎は供に連れた小者を煩わせることなく、自ら門前に立ち、

「頼もう」

大きく呼ばわつた。

しばらくすると枝折門の扉が急に開いて、目の前にぬっと現れた顔を見て絶句する。

相手は男か女かも一瞬わからなかった。髻まげの結い方は女のようなだが、お互い顔がまともにぶつかる位置にあり、仁八郎は決して小柄なほうではないから、相手は尋常ならざる大女ということになる。

上背ばかりか肩幅も広くて肉づきがいい。色黒の大きなお盤ばん台だい面で、そこに獣のような黒眸くろめがちのまあるい眼をぎよろつと光らせている。唇は獐どうも猛もうなぐらい真横に大きく裂けた、ひと口

にいつて品のない人相で、身なりも黒無地の木綿物という粗衣ながら、

「何用じゃ」

この高飛車な物言いで、仁八郎はむっとするよりも先に呆れた。出だしがこれでは先が思いやられる。

こちらは着流しで黒羽織のすそを帯に巻き込んだ、ひと目で八丁堀の同心とわかる装いだが、相手はそれを見て別に恐れ入った様子もない。

「北町の奉行所から参ったとお伝え願おう」

と、こちらも噛みつくようにいえば、相手もさすがにそれなりのお辞儀をして速やかに内へ戻り、しばらくするとふたたび姿を現した。

案内されるまま、仁八郎は飛び石伝いに足を進めた。左右の前裁せんざいを横目に中門らしき片開きの枝折戸をくぐれば、急に眼前が開け、まだ新しい、思いのほか立派な数寄屋普請が現れている。それはこの庵主が世にある時の権勢を偲おもはせるのに十分なものだ。

仁八郎がやや臆した面もちで玄関に足を踏み入れると、こんどは先ほどと打って変わって小柄な色の白い年増の女中が現れた。蒸ふかかしたての饅頭まんとうに細筆でさっと目鼻を刷はいたような顔で、にこやかに愛想よく出迎えてくれる。

「どうぞ、こちらへ」

また黙って案内にしたがい、薄暗い廊下から明るい縁側に出て、手入れの行き届いた庭木を横目にまっすぐ進むと、黒漆くろめりの縁をぴかぴかに光らせた白い小襖こぶすまが正面に立ちふさがった。女

中がそれを開けて中へ入ると、得もいわれぬ芳しい匂いが鼻をつく。縁側の障子を透かした柔らかな陽射しで、室内は案外と明るく見わたせた。

高麗縁こうらいべりの畳が四畳半に敷き詰められ、奥は一段高い床の間になっていて、その横にもう一方の出入りの襖が見える。床の間にはなんだか妙なものが飾ってあり、あとで近づいて見れば楽器の琵琶だった。

襖の手前に炉が切っており、茶釜をのせた炉のそばに浅紫の法衣をまとった人影が見える。

仁八郎は慌てて帯から羽織のすそを抜き、その場で腰をおろして平伏した。

「はっ、ご挨拶を申しあげます」

勢いよくいったはいいが、うつかり庵主の名前を聞き洩らしたせいで次の言葉が出てこない。

「はっ、はっ、常楽庵の……庵主様に置かせられましたは、ご機嫌うるわしう」

なんとか続けたところで、くすつと噴きだすような笑い声がこぼれた。

「もそつと、お楽になされよ」

仁八郎は思わず顔をあげ、相手の姿をまともに見てしまう。

何もかも思いがけないことばかりだった。

庵主は元大奥の女中で、かなり高い役職に就いた人物らしいという話を近藤から聞かされてゐる。

「大奥勤めは一生奉公で、ひとたび中に入れば決して外には出られぬと承っておりますが……」

と問いかけたところ、近藤は例の甲高い声でこう答えたものだ。

「上様のお手がつかれた方は亡くなるまで大奥でお過ごしになるが、余の方々は病を得たり、年老ゆれば隠居を願ひ出て、町住まちずみを許されることがままあるそう。外に出れば比丘尼びくにとなるのが定めながら、女子おなこといえど三十年もご奉公をすれば、勤めた時と同じだけのお扶持が一生涯頂戴できるといふのだから実にうらやましい話ではないか」

なるほど、そういうことなら、立派な数寄屋で人並み以上の暮らしができてもおかしうはなかつた。

とはいへ若い身空で男を知らずに過すごし、窮屈な御殿勤めや、料簡りょうけんが狭い女同士の暮らしで居心地がよかつたはずはなく、きつと朋輩ほうばいの意地悪にも泣かされたであらう。

つまりは一生のあいだの好い季節をすっかり奪われ、腰の曲がつたしわくちや婆さんになつてようやく世間に出て来たところで、何が面白いだろう。うらやましいどころか、氣の毒でしかない。

当人もまたきつと大奥勤めの矜持きやうじで凝り固まつて、世間並みの幸せを知らずに生きてきた者にありがちな、偏狭で権高な鼻持ちならない女に決まつている。

そう思つたからこそ、ここを訪れる足もつゝ鈍りがちだったのだ。

第一、訪ねたところで、こうしていきなり庵主に会えるとは思つてもみなかつた。

なにしろ大奥に勤めるのは表向き二百石以上の禄を食はんで、上様のお目見えが叶う旗本の娘とされている。片やこちらは三十俵二人扶持の御家人で、しかも不浄役人と蔑まれる身の上だ。

門前払いはまだしも、玄關先で適当にあしらわれて引き下がるのがお定まりと踏んでいた。

それにしても……。

仁八郎は目の前に座った相手の姿かたちがまったく解せないのである。

比丘尼ならば比丘尼らしく頭に白い帽子ぼうしを付けているかと思いきや、髻は結わないまでも髪を露あらわにしていた。ちょうど肩のあたりで尼削あまそぎに切りそろえた髪は意外なほど黒くてつやつやしており、前髪を耳にかけて後ろにさらりと垂らしたふぜいは艶なまめかしくさえある。まさか尼僧の身で髪を染めているわけではないだろうが、顔をまじまじと見たところ、秀でた額にはしわもなく、肌つやがとてもいいから、ちよつと年齢の見当がつかない。

華奢きゃしゃというほどでもないが想つたより小柄だし、押しだしが立派とはいいいがたい小作りな顔で、目鼻立ちも派手ではなかった。切れ長の眦まじりは年齢相応に風ないで眠り猫のように見える。

ところが、その眼がしばしばと瞬きながらしだいに大きく見開いて急に輝きを増してきたので、仁八郎はどぎまぎした。

両の黒眸ひとみがまるで小娘のように躍動している。白い頬にほんのりと朱あかみがさして、紅をひかない小さな唇からぼそっと思いがけない声がこぼれた。

「志乃しのと申されよ」

「はあ……」

「志乃と呼んでくだされ」

「……志乃様、とお呼びしてよろしいので……」